「シンセサイザーの教育実践への活用」

領域名：母性保健看護・助産

報告者：赤嶺唯

教育及び実践の課題

母性保健看護・助産領域では、「周産期保健看護演習」で褥婦の観察のシミュレーション学習を取り入れている。産褥 1 日目の褥婦の検温・観察場面において、多くの学生は排尿状況について排尿回数や尿意を確認するのみで、排尿間隔や残尿感、縫合部痛の有無・程度などの排尿状況に関連する項目まで丁寧に聞き取る学生は少ない現状であった。褥婦の観察項目を形式的に確認する学生もおり、“なぜその項目を確認するのか”を考えながら、問診・観察を行うという意識づけにつなげる指導が必要であった。

活用した論文の概要

Kawasoe et al.（2020）は、経膣分娩後の産後尿閉の有病率と危険因子、産後尿閉の治癒過程について調査した。産後尿閉の危険因子については、分娩後に尿閉を経験した 77 人の女性とそうでない 385 人を対照群として、年齢と出産回数別に一致させた条件付きロジスティック回帰分析を行った。その結果、産後尿閉の有病率は 1.2%、産後尿閉を起こしやすい危険因子は、硬膜外鎮痛と会陰切開であった。また、産後尿閉となった女性の半数以上は産後 72 時間以内に軽快していくが、産後 10 日以上経過しても尿閉が続く者もいたと報告している。結果を受け Kawasoe et al.は、看護者は産後尿閉に関する知識を深めるとともに、産後尿閉となった女性の排尿評価を行う必要があるとし、産後の治癒過程について女性へ説明することが女性の不安を和らげることを示唆している。

教育及び実践への活用

上記論文より得られた知見を踏まえ、「周産期保健看護Ⅱ」、「助産診断・技術学」では、産後尿閉を起こしやすい要因（とくに会陰切開との関連）について、その理由とともに分かりやすく学生へ説明するよう心掛けた。「周産期保健看護演習」のシミュレーション学習では、産後 1 日目時点で尿意がない褥婦役を教員が演じ、排尿回数や尿意の有無に加え、排尿状況に関連する項目を丁寧に聞き取る必要があることを学生自身が気づけるように働きかけた。また、産後尿閉・排尿障害の治癒経過の目安について具体的に褥婦へ説明することにより、褥婦の心理面に配慮した看護実践につながることを伝えた。「周産期保健看護実習Ⅱ」、「助産実習」では、実際に受け持ち褥婦の排尿状況について丁寧に確認し、アセスメントする様子が見られた。よって、産後の尿閉（排尿困難）の早期発見および対応を意識する教育につながったと考える。

参考文献

Izumi Kawasoe, Yaeko Kataoka. (2020). Prevalence and risk factors for postpartum urinary retention after vaginal delivery in Japan: A case-control study. Japan journal of nursing science, 17(2), e12293, 1-9.

令和 4 年 9 月 30 日作成